

## 学際的ワークショップ 『精神分析の知のリンクにむけて』 第11回「ジョイス、ベケット、精神分析」

ジョイスとベケットー20世紀文学を代表する二人の作家は、文学史上の事件であると同時に、精神分析家の思索に大きな影響を与えている。ラカンは、最後期のセミナーで、〈発病しなかった精神病〉の具体例としてジョイスを取り上げ、彼の言語創造の謎から、〈サントーム〉という概念を構築し、自らの理論体系を大幅に更新している。

ジョイスは、『フィネガンズ・ウェイク』での極限にまで至る言語破壊の実験によって、文学史上特異な位置を占めている。ジョイスより一世代以上遅れてダブリンに生まれたベケットは、ジョイスを文学上の父と崇め、アイルランドからパリに出て、ジョイス家に入出入りする。ジョイスの娘ルチアは、家に入出入りする若きベケットに夢中になり、愛を告白するが、ベケットに拒絶され、統合失調症を発病する。ジョイスは精神科医による診断を受け入れず、次々と医者を変え、治療に奔走する。この出来事は結果としてジョイスとベケットの決別を引き起こし、ベケットは深刻な精神的危機に陥る。その後、ベケットはイギリスでビオンの精神分析治療を二年間受けるが、この治療はベケットからの一方的な「中止」の決定で終わる。しかし、この分析経験はベケット、ビオンの双方の創造性を刺激した。ビオンの晩年の小説執筆にもベケットからの影響を読み取ることができるだろう。

今回のワークショップでは、ジョイスとベケットという精神病構造を持った作家の言語創作から、精神分析家は何を学ぶことができるか、という問いを巡って議論を行う。今関裕太氏は次世代を担うアイルランド文学研究者であり、現在はジョイスの『フィネガンズ・ウェイク』の新訳を試みている。福田大輔氏は、Association Mondiale de psychanalyse に在籍するラカン派分析家であり、清野百合氏は、日本精神分析協会の候補生で、優れたビオン研究者である。ジョイスとベケットという問いは、これまでも繰り返し論じられてきた。しかし、ラカンのセミナー『サントーム』の解説書が出版され、一方、ビオンの臨床への導入が格段に進んでいる現在、私たちはこれまでの論点をさらに先に進める段階に来ていると言えるだろう。

日 時：10月12日（月、祝）13:00～17:00

場 所：小寺財団セミナールームとオンライン(Zoom)によるハイブリッド開催

参加対象：どなたでも参加できます。

発表者：今関裕太（江戸川大学）

：福田大輔（青山学院大学）

：清野百合（さくら精神分析研究室）

討論：藤山直樹（個人開業）

司 会：十川幸司（個人開業）

参加費：4,000円

定 員：100名（会場25名まで）

申込期間：2026年8月12日(水)～9月28日(月)

申込方法：URLまたはQRコードよりお申し込みください。

<https://forms.gle/5UcikFuFbP7PXBFR>

問い合わせ：小寺財団事務局 [kodera.fps@gmail.com](mailto:kodera.fps@gmail.com)

